西朋

Tourenbericht

9

都立西高ＯＢ山岳会

山行計画

35　西朋第三年度冬山

魚沼八海山　　隊長　田中　実

1955年12月30日—1956年1月10日

36　富士山氷雪技術訓練　係　田中　実

2月19−20

37　鹿島槍東尾根　　係　田中　実

2月27日-3月5日

38　北穂高岳東稜　　係　福田広二郎

3月30日—4月6日

集会通知

1月集会　14日　6時　氷川　（福田）

2月集会　4日　6時　氷川　（佐藤）

3月集会　24日　6時　氷川　（平沢）

西高山岳部創立十周年記念

30 川苔山集中

《編成表》

小川谷		
A	滝谷（敗退）	現役松田、黒沢
B	悪谷	OB田中実、鈴木輝夫、町田明、現役丸
C	滝上谷（失敗）	現役木下、北村、山岸、成城
D	横篠	OG山中富佐子、岩崎元子、竜山敦子
E	盛地谷	現役京田、佐伯、池田、高山、石垣
F	火打石谷	OB亀田広三郎、川口和雄
G	逆川谷左股	現役田辺、田中（章）小寿野、沢田
H	熊鷹沢	OB田中将利、佐藤信治、林武志
		小田尚於
		合計OB12　現役16

《集合》

九月廿五日午後二時柳子口小屋

川苔山集中は昭和二十六年四月にも行われて居るが、今回は全部異ったルートとした。殊に未知の領域にある小川谷支流大京谷（滝谷）の究竟を含めたが、整落により敗退に帰し、しかも再三整られて居る滝上谷の退却を見たことは、現役山岳部の実力低下何題として、今後の指導に大なる課題を残した。A、C、E、Gの各隊報告は西高山岳部々報第十五号参照のこと。

B 悪谷

九月二十四日

氷川（八・四〇）—日原（九・二五）—鍾乳洞（九・五〇）—悪谷出合（一一・五五～一二・四〇）—二俣（一三・一五）—ナメの連続（一三・四〇～一三・五五）悪谷小屋（一五・〇〇）

朝、立川に定刻通りに到着した所まだチートフリーダーが来ていないと云う。六時を過ぎてからチートフリーダー及び現役の遅れたのがやって来たと云うわけで、余リスムーズではなかったが西高山岳部創立十周年記念行事としての山行がスタートした。日原でバスを捨て小川谷の林道をもくくと悪谷出合へ向って歩く。カロー小川谷林道分岐で滝上谷へゆく者であったのを種々な條件を考えて悪谷隊に吸収、これは後になって考えれば適切な処置であったと思う。対岸に滝上谷、大岩谷等をながめて足を急げばこれから辿行せんとする悪谷の出合についた。

出合は両岸とも岩壁で苔い・昼食をすませて出発、しばらくして小滝二本を越せば七米位のチムニー滝にぶつかる。町田、丸、鈴木、田中のオーダーで難く突破、次に現われた小滝は左のチムニーをスタコラと登る。行く事しばしで巾広い五米～七米の美滝にぶつかる。これも右側を快適に突破すれば沢は二股になる。この辺は源流に近い様相を呈し少し奇異に感じる所だ。二俣を左に入るとしばらくしてナメの連続を迎える。ナメにナメられてバスすれば、一〇米近い滝にぶつかるが左手から巻口に廻り込み突

破する。続く二本の滝を登く越せば急峻なルンセ状なゴルジェとなり難い気持で登る事が出来た十五米のチムニー滝は印象的だ。チムニー滝を左手に登って落口に立てば水線は二分する。余り時間が早いので武蔵の二代目を演じた後、左にルートを取る事にした。しばらく熊笹の藪コギをするうち小屋の屋根、系ワン等を見附け小屋の有無が心配になった。行く事しばしで石垣を見つけ続いて水場に出、小屋の前に立つ事が出来た。小屋は小さく四人入るのがやっとである。雨がしのげる程度。滝谷へ向ってコールを掛ける。夜七時前、京田、佐伯が来る。何事かと思えば丸の事、丸が我々と一緒に居るのを見て安心し、すぐ一杯水へ帰って行った。夜はファイヤーを囲んで斯のテナーサックス、鈴木のアドラー振りのハーモニカ、それに田中のイブモンクンばりの美声を加えてシャンソン、民謡等を心ゆくまで合唱合奏、八時に連絡用の花火を見物に出掛けたが見る事が出来ず、滝谷の連中を心配しつつ小屋にもどる。

九月二十五日

出発（八・二五）―一杯水（一〇・〇〇～一〇・二〇）―ソバツブ山（一一・二五～一二・〇〇）―獅子口小屋（一三・一〇～一六・一五）―川井駅（一八・四〇）

朝食後、滝谷隊を迎えに出るべく出発（六・四五）水沢林道を西谷山方面へ向って出発する。十五分後に滝谷隊と会う事が出来た。聞けばF4で二十米滑落し前途を断念し、西谷を経て来たのだと云う。滝谷隊と合流後攻めて滝谷小屋を出発、獅子口小屋に向った。全行程とも天気にめぐまれ、シシロ小屋に到着合同コンパを行って解散、一路川井駅に向った。（鈴木）

横スズ尾根

九月二四日（晴　時々雨）

日原（八・三五）―滝入山（八五五）―一杯水（一二・一五～一三・一〇）―ソバツブ仙元峠分岐点（一三・三五）―ソバツブ山肩着（一四・〇〇～一六・〇〇）―ヴィバーク地点着（一七・四五）

早朝立川を出発する。はっきりしない天候が気懸りではあったが一年振りに背負うキスリンクの重みに総てを忘れて駒一杯に大気を吸込んだ。氷川よりバスにゆられること四〇分許り、日原渓谷の流れを眺めそのひびきを快く耳に受ける。

部落の中程にて私達三名は兵役と別れ右手の畑途に折れた。そして原林帯のジグザグ道をあえぎ〳〵高度をかせぐ。冷い汗が目にしみる。静けさだけが私達の足音にこだます。滝入ノ峠近くより杉林は草原となり明るさを取り戻し、右手下にはアブラメンが亦背後には鷹ノ巣山が望まれた。径はやがて横スズ尾根にとりつくが此の頃より案じていた天気が悪くなってくずれ始めパラ〳〵と雨に見舞われる。用意の雨具を身につけてゆっくりではあったが確実に歩みを続けた。いくはくかして右手より今は廃道となっている倉沢からの登路を合せて径は一杯水へと続いている。一杯水に着いたのは予定より一時間程遅く此処で空腹を満すべしと協議一汐昼食をとる。ゆっくり一休みと思ったものゝ体の冷えにいたゝ

まれずに早々に出発した。何時か雨も上りポタ〳〵と葉から滴る雨の名残りを首筋をぬらす。さてそれからの道中はおらが世界とまかり出た力エル殿に度肝をぬかれること数度。その上私の悲鳴に他の二人がおどろく始末。矢張り女性三人集れば何とか申す通りなのでしよう。一杯水より四〇分程で仙元峠ソバツブ分岐点に至り、なお林道に沿って三〇分許り進むとヒョックリソバツブ山の肩に出た。すでに一四時。四囲の山々はその山肌をガスの中に没してしまっていた。此処で戸惑いしたゝめに思わぬ時が流れてしまい仕方なく私達はオカンの用意にとりかゝった。そこに来合せたのがA氏なるお方だった。時刻は十六時、これから川苔山まで行くと仰有る。では私達も御一緒にと云う事になり歩き出した径が何と烏屋戸尾根。（これは今にして思えばのこと）一時間余り夢中で暮色迫る尾根道をたどる。変だと気が付いて磁石を見ればそれもその筈西に進んでいる。これでは遭うと判ったものゝすでに日は没し始めていた。再びオカンを決意、尾根より杉林の中をシャニ無二下る。肩より一時間四五分、久し振りに水の流れを耳にした。

心勇兵に救れ眠て、はいたが、初めて経験するオカンについてあれこれと思いめぐらすのだった。暗い谷間には私達のローソクの灯りだけがまるで生き物の様にまたゝいていた。

気にしていた雨も小降りで済み夜空を足早に流れ行く雲の切れ間より明日の天気を約束するかの様に無数の星がまたゝいていた。

九月二五日　（晴天）

BP発（五、一〇）ーソバツブ肩（八、四〇〜九、四五）ー鳩平（一〇、三〇）ー獅子口小屋（一一、四五）

寝られぬ侭に二時頃よりラジウスにて気永に御飯を炊く。全員起床四時。さほど寒くない、それに今日は晴天らしい様子。朝食を済ませオカンの後片付け等手早く仕終り夜明けと共に出発する。夢中で降った三〇分、今日はしっとり雨を含んだ草に手をつき乍ら四つん這いで登ること約一時間。昨日歩いた烏屋戸尾根をナタメを目当に恐実に逆戻りする。ヴィバーク地点より三時間半、コンパのお菓子が肩にくい込み思わず顔をしかめてしまう。

昨日に比べて今日の天気は素晴らしい秋晴れ、ソバツブの肩に立ち、フッーと大きく深呼吸。お互に顔を見合す。そして一時間程休憩の后、来合せた現役と共に鳩平への林道をたどった。

昨夜ヴィバークを共にしたA氏とは鳩平にて別れ、一気に獅子口小屋への下り径を急いだ。（山中記）

F　火打石谷

九月二十五日　晴

氷川にて青梅線に乗り込む。偶然に、故石川宏元君の御両親と西高の逆川班、それに松本先生と御一緒のうら若き御婦人と一緒になる。コース及びピッチの関係で火打石出合まで松本先生達と一緒に行った。出合の下流より本谷へ下りれば難なく火打石谷に入れることは前回の踏行で知っていたが、流線への下りがあまり

急だったため出合の上流で本谷へ下りた。この出合までの間ゴルジュを為し進む能わず、火打石の右岸を大きく巻きF1の上へアプザイレンにて下降する。二人ともクリニカーである。まったくカリッ、カリッとよく滑る。F2は右岸を経く、F3はコケとしめりがちなスラブに悩まされながら、なんとかものにし、F4の、磨かれたスラブによって作られている釜に達する。この辺は完全なゴルジュを為し、暗く、そしてやゝすごみのある様相で、F3よりF5は互にカマをもって連続し、この間飽きることを知らない。「ワラジの方がいゝな」なんてつぶやいても始まらないと知りながらもぐちは出る。「流れによる石灰岩の浸蝕は顕著である」なんてことを治水学の講義で聞いたような気がして来た。F5は二年ほど前に一人で来たため、直登出来ず右側へ逃げた所だ。ここでアンザイレン、トップ川口、流れの右側をつり上げで突破せんとするも、ハーケンを打つりスなく、やゝ右側へ巻き気味に出る。アプザイレンにてF5の落口へおり、F6の直登をさけ、（不可能なんだ）右岸のチムニーへ入る。ザックがジャマでバッカンドニーどころでない。大分シブッてなんとか上に出る。

こゝで火打石谷下部廊下状は終りである。しばらく川原歩きをしているとゲジゲジが大分大勢現われて来た。途中間題にするような滝もゴルジュもなく、ゲジゲジだけ気にして行くと沢が二分する。右すれば廣ヶ谷である。左の火打石本谷へ入って間もなくヒ・八氷の、下部が空間となり、水が上から落ち込みスダレ状を為している滝に会う。全く不可能と見為し左岸を巻く、水も清水となり、ゲジ〳〵も影をひそめたころ昼食とする。こゝより丸山の鞍部と蹄平を結ぶ道に出、蹄平に到着する。集合十五分前まで蹄平にて他のパーティーを待つも現われず、小屋までフルに飛ばす。タッタ二分とは、さすが二十九年度也。小屋にはすでに、山中さん、鬼山さん、岩崎さんの三人と松本先生達のパーティーが到着していた。（記　福田宏二郎）

H　入川熊鷹沢

九月二五日

鳩巣（八・〇〇）―山神（八・二〇～三〇）―布滝沢出合（八・五五）―早滝（九・四〇～一〇・〇〇）―赤抗尾根（一一・二五）―丽子口小屋（一二・五〇）

鳩巣に降りたのは丑に八時を過ぎて居た。山神で一風入れ、峠部落の神堂の前の道を布滝沢出合目がけて下る。入川谷に入り、側の通り小さな滝を幾つか登ると熊鷹沢出合へ着く。早滝を見物してナーゲルをわらじに履換える。熊ヶ沢は本流より水量がぐっと少く、出合はすぐにクラック状四氷の滝だ。取付から強引にシャワークライム。すぐに三氷滝二つあり、トヨ状のF2六氷も水線直登、又三氷級三本あり。この辺よりゲジ〳〵が次第に多く出て来る。F3一二氷で、ザイルさばき練習の為、SOHTのオーダーでアンザイレンし、まず正面左のバンドに取付き、右へトラバースシャワーの中に入り更に左のリッペに取付いて直登・コン

ティニアスのまゝ下4一〇米下まで行く。この滝もシャワー中央がルートだ。快晴とは云え九月中旬中々寒い。それから三米二本どうやらこれで滝も終りらしい。ブッシュもひどくなり、一服后沢と別れ尾根に取付く。やがて上段林道に出、赤抗尾根へ。

川音頂上の方から笑声が聞えて来る。柳子口についたのは、案合時間スレ〳〵であった。（佐藤）

31. 魚沼三山

P　平沢勇　鈴木輝夫　町田明　林武志

十月九日

大厩（八四〇）—里宮（九、〇〇〜二〇）—大倉分岐（一二、三〇）—浅草岳（一四、〇五）—千本松小屋（一四、二〇）

列車の中から眺めると、ほんのつまらない草山に見える。これが冬になると荒涼な様相を呈するのだとは信じ難い。それが天候の故であるとしても、悪い為には環境だけでなく案内がなければいけないと思うのだが、この山ではその案内が感じられないのだ。馬鹿にしてなめた様な、そして幾分未知に対する不安を折混ぜた複雑な気持で駅に立つ。最初のうちは泉だ。バスに乗りそこないそうになったり、社務所でお茶を飲んだり、里宮への道を暑いとぼやいているうちは……。

そこから三合目までは物も言えない登りになる。景色はガスで

備品總覧

本年度中に於ける備品補充見込も、ほゞ完了したので、總覧としてまとめました。せいぜい御利用下さい。総人員は西用廿六、西苛世、計五十六名　西朋登高会　西高山岳部係

登攀用具		幕営用具	
ザイル東京製綿三〇米	2	N02夏用三人アルペン天幕	3
〃　〃　四〇米	1	N03夏用四人家型	
〃　マンモス三〇米	1	N05冬用四人ウインパー型	
カラビナ	4	N06夏用六人家型変型	
ハーケン	18	N07夏用四人家型	
ハンマー	2	N08冬用四人ミード型	12
ピッケル（雪馬1ルビスト含）	3	エアマット（六×二尺）	3
アイゼン（内田）	3	ヘアロックマット（三×一、五尺）	
鞘かん	18		

幕営用具			
ラジュース（スペア・プリマス、スターマックス、杉本）	4	大鍋（夏用）	3
アルコールバーナー	2	小鍋（冬用）	4
スコップ大	1	台皿	2
鋸	3	包丁	4
鉈	4	計量カップ	1
石油タンク（ガロン入）	5	コッフェル	1
寒暖計（最高最底）	1	テルモス	1
		その他小道具	1
		参平	

二月作成予定
ツェルト（八〜八人用）
合計時価十八万五千円

見えないのだ。四合目から尾根は狭くなり広くなる。紅葉がきれいだが歩く所が地面より三尺下なので見るためには上を仰がねばならない。狂った様な紅から開放されると最后の浅草岳の登りだ。沈殿の補登世介で頂上に立つと小舎はもう目の前にある。五時間の登りだったが、その割に長く感じた。所謂あるき登りと云うのであろう。

天気が悪くなった様だ。

十月十日

小屋（七、一五）―奥ヶ岳（八、一五～三〇）―おかめ魂（一一、一〇～四五）―波川（一三、一五～一三、四五）―中の岳小屋（一四、三五）

新雪をいただいた中岳、駒岳がよく見える。ひとまわりして向う側だが、前景から北景を望むより大分小さく見える。案外近いので安心した。駒まで行く予定なので早立ちした。（僕にしては）八海山のピークは想像して居たよりグッと小さい。高さ五〇～一〇〇米位の、弾丸と云いたいがピストルの様な丸い岩峰がいくつか並んで居るわけだ。岩は浜灰岩らしく、比較的もろいのが気になったが、何と云うこともなく最高峰奥ヶ岳につく。奥岳の下りだけは約廿米だが、ノッペリした岩なのでクサリのお世話になった。（ハッ峰についての詳細は冬山検討会にゆずる）九岳、五葉池と丹沢よりシケた尾根を辿ると、おかめ魂きまでの長い下りだ。然し悪いと云う予感はしないが、さすがにおかめ近辺は一寸した急な岩尾根のひどい区間で、その一端がしのばれた。お月山へは雪崩の出そうな急斜だ。やっと雪が出て来て約五寸。降りて波川。後天路上に水のある唯一の場所だ。二回目の昼食中に天候最悪風雨となる。あわてゝ歩くが新雪の下が結氷と泥で甚だ困る。水が上着を濡す頃、中岳着、状況判断の結果少し早いが泊ることにする。

十月十一日

小屋（四、二五）―駒岳（九、〇〇）

雪を期待したが気温高く雨。大湯まで二ピッチの決心をする。濡れても寒くないのが幸だが、それにしても足下が焦燥で滑って体の消耗甚しい。おかめ魂と桧原下は同じ様な所なので時間を余計に見積ったが、半分で駒の小屋についた。頂上はむろん登らない。火を燃して湯を沸すと立上る気がしなくなる。家拵しして水があったら泊ることに占を立てた結果泊る事に決定。冠水氷の様な妙な氷だった。

十月十二日

小屋（六、四五）―小倉山（七、四五～八、〇〇）―大湯（九、一五）

初めて陽の目を見た。荒沢岳とやらにもアイサツ出来た。再び紅葉の路をのどかに歩き（天気がよいので）大倉山から直接大湯に下る。大湯で風呂に入り昼食を食べて部屋代共にメめて一人百五十円せ弐為のため記す。

結局紅葉を見る為に三日間歩いた様な気がした。（平　沢）

32 穂高岳

P　田中実　佐藤信治　長野正弟　見里朝規

十月一六日（晴）

島々（六五〇～七三〇）－上高地（九四〇～一〇、三〇）－明神（一一、一〇～一二〇）－徳沢（一二、〇五～一二五）－奥又岩合（一三、〇〇～一〇）－松高ルンゼ（一四、〇〇～三〇）－池（一七、〇〇）

バスが進むにつれ、梓川の紅葉は一段と美しさを増す。バスの中はコーラスで仲々楽しい。上高地は夏と違い、人の数も少く、河童橋から眺めた穂高は雪が見えない。五千尺前で朝食を済ま り一路徳沢へ。途中紅葉狩の観光客の数パーティに会う。新村橋を渡り百米位の所より奥又谷へと入る。こゝで昭和山岳会の人々と別れる。いよ〳〵登り径となり、沢に出てゴーロの中をどん〳〵高度を増す。やがて北尾根のP7が正面に見える辺り左手に松高ルンゼが見えて来る。昼食をとり、最后の水を飲み出発。東京新道は取付きはちょっとした岩をトラバース、それから尾根を急登前中々のアルバイトだ。やがてちょっとしたヤセ尾根に出る。そこからはいくらか傾斜がゆるくなる。そこからは蛇、大滝の山々が夕日に美しく浮き上って居る。この頃よりNが元気なくなる。下から見た時はこの尾根も近く感じられたが中々長い。ちょっとした平地に出る。ここより本谷の大きな滝や残雪が見える。Nに元気をつけて又登る。やがて松高ルンゼに入り、そしてルンゼを登る。やがてトラバース気味に左手に道が入り込んで居る。そこを登り終ると池が我々を迎えてくれた。すでに二つの天幕が池端にはられて居た。

陽は既に前穂の向うに沈んで居た。吾々の近くの関西の人が吾々にミルクを御馳走してくれた。夕食は簡単にすませ床につく。空には星が一杯に輝いていた。

十月一七日（晴后曇、夜雨）

BC（八、〇〇）－五六（九、三〇～一〇、〇五）－三、四（一一、三〇～一二、三〇）－前穂（一三、三〇～一四、一〇）－A沢下降点（一四、三〇～三五）－BC（一五、三〇）

天気は今日も晴天、北尾根へ行くべく、本谷をトラバースし、少し下る。そして五・六のコルよりの沢に入る。中々足場が悪く沢通しには登れそうもないので、右岸の尾根に取付き、又沢に入る。やがてスカイライン上に出る。そこがコルではなく、一度少し下り登った所が、五・六のコルであった。五峰はなんなく乗越し四五のコルに出る。四峰はルートにより登り　中程より二つに分れ、左へトラバースのルートを取る。ここは一度下り、奥又剣の岩壁に取付き、三・四へトラバースして行った、足場が中々悪く、三・四コルに出る所は特に悪かった。三峰フェースのプロフ

イルは仲々すごい。昼食をとり、いよ〳〵三峯に登り始める。恐つたより楽に登る。チムニーのところより西沢側に出て、三峯はいつの間にか通過し、いよ〳〵頂上だ。二回目の食事をとり、明神へのルートを下る。三本槍をすぎ、コルに出るちょっと前に、ルートより少しはずれたところに岩峰があり、その左側よりA沢が下に落ちている。A沢は雪渓全然なく、足場が悪く大変オゾイ。これでは明日のA沢登りが思いやられる。

やがて稜換点に来る。上から正面は岩氷のはりつめた滝になっている。やがて三尺を通過、池が見え、BCもはっきり見える頃で、今日歩いた方向をながめながら、いろ〳〵話し合った。

BCについたのは、既に陽も前尾にかくれる頃であった。夜は雨に会い、二、三時間のすいみんで昔三時には目をさました。

十月一八日　（雨）

BC撤収（六・〇五）―ルンゼ出合（八・〇〇）―徳沢（九、三〇～一三、三〇）―上高地（一五、二〇～一六、一〇）

昨夜来の雨に皆濡れ、A沢より前穂奥壁縦走のコースをあきらめ三時より全員起きて食事の用意、そして天幕撤収、出発したのは小雨が降り、霧にまかれた大時。一昨日登ったルートを徳沢へ徳沢へとぐん〳〵高度を下げる。やがてルンゼ出合につく。ここいらで少し雨も止む。一服右一路徳沢へ。徳沢着九時半。泊った人は出発して居なかった。こゝで田中、見田は残り、上高地四時十分で帰路につく。（佐藤記）

33 武甲北面

中ノドウエ

パーティ　福田宏二郎、小田尚於、町田明
装備　ザイル（三〇×一一）　ハーケン　一〇　カラビナ　二　ハンマー　二

十一月二日　晴

西武デパートにて明日の食糧を買入れ、池袋発一六・〇〇飯能行き（飯能にて吾野行きと連絡）に乗車、吾野にて秩父行きバスに乗り込む。バスの車掌は好感が持てた。月がとても青いから、我々はゆっくりしたテンポにて根古屋より佐野大作氏宅へ向う。御夫妻の歓迎をうけ風呂に入り、五時に起してくれるよう佐野夫人に頼み九時就寝。

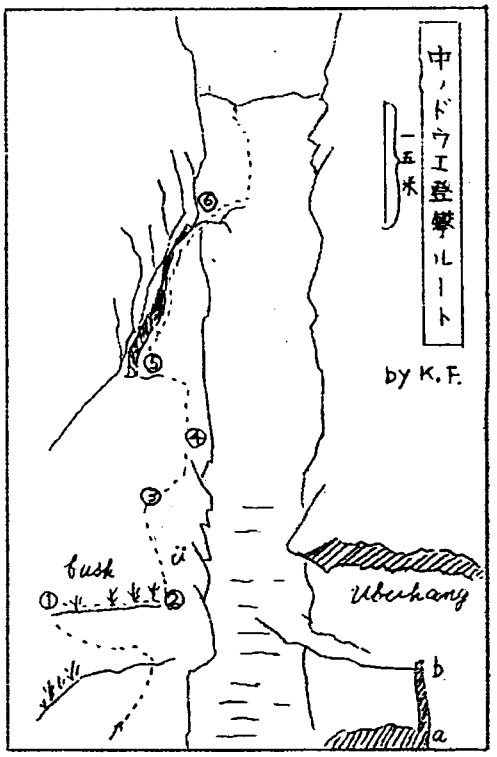
十一月三日　晴

心づくしの味噌汁が美味い。早々に朝食を終え、登山口にて六時夫人の見送りを受け山へ向う。石灰採掘場のトラバース中「ドカーン」とハッパをかけられ、ドギモを抜かれる。谷筋（と云っても水は無い）に入り、踏跡をつゝけるに、崩かれた石灰岩はナーゲルに最悪のコンデションを与えることを予告しはじめる。昨風岩はこゝで白沢を通行していた我々を完全にさえぎって了った。右すれば西のドウエ、左すれば東のドウエ、そして中央はその険悪さに於て白沢本流の筆頭を為す中ノドウエ、こゝに至るまで我

我は三者のうちどのドウエを攻撃するか決定していなかった。しかし問題はなかった・自己の実力より低いルートを選ぶことは、己を甘やかすことであり、それは技術の後退を、そして戦斗意欲の消失を意味するものだ。我々は躊躇することなく、中ノドウエへザイルを伸し、ハーケンを打ち込むことを誓った。

ルートとしては左岸より、リッヂに②より取付き、⑥よりドウエの中央に戻る這いバンドを左へトラバースして正面へ出、六十米の岩壁を直登するか、右岸の草付より大きなバンドに入り左側のフェースを乗りこして正面へ出るか、ルートとしては前者の方が価値があるように見えるし、後者のルートはすでに登られている記録がある。こう見えてもアルピニズムの流れを汲む者だ、間違なく前者を選んだ。

オーダーは、高田、町田、小田、正面まで戻るバンドへ連絡するリッヂにルートを決定、草付きのもろい岩に一米二米とザイルを伸す・バンド直下にてやゝハング・左右逃げ道は無い。我力を左上のリスへ打ちこみ吊上げにて、このハングを突破せんと試みるも不能、再ひスタート点に戻り、第二のルート（前述したもの）右岸より取付く。灌木の生えた広いバンドの左端①にてセカンド確保、続いてラスト到着、つゞいてバンドを右にトラバースして②に到る。この間全く、安易でやゝ物足りなさを感じる。このバンドの右端より正面に出んとするもハングのため不能、これを左によけ・ドロまじりの岩に苦斗を演じながらテラス③に出る。つゞいてマサツ係数の少いフェースを④へトラバース、ナーゲルが最悪だ。中間ピンにハーケンを一発お見舞して④の小さなテラスに出る。セカンドがつゞいて④へ、ラストは③にて、トップ行動開始、ホールドスタンス共に少く、テラスから一米ぐらいフインガーホールドを頼りに登るも、その上は全くホールド、スタンス貧弱で垂直、吊上げで「グッー」とへばりつくも最高にオゾイ。再びそっと下してもらい・ナーゲルをぬぎ裸足ときめこむ、神様はうまく作ったものだ。裸足となると石灰石も、ヘッタクリもない。実に快適に利く。吊上げ成功して左のテラスへ微少なトラバース、アブミ使用にてどうにか廻り込む。⑤にて④のミウテルを⑤へ、そしてラストは③より④へ、⑤から⑥は左側がクラック状を為し、右側がカンテで⑥のテラスへのびている。空身でこのカンテへ、へばりつく、体を出来るだけ左側のクラックへおしこみヒーヒー云いながら⑥のテラスへ。セカンドは⑤→⑥ ラストは④→⑤→⑥、このテラスから上部、左側全く手がつけられず、また左へ、トラベースして正面に進出あるのみ・感覚的にハング気味のトラバース、吊上げにてトラバースして稽いた。上は十米ばかりほとんど垂直にきり立ち、両岸とも絶対に逃げられない。「オゾイ！」セカンドのセルフビレイに一つ今の吊上げに一つカラビナを使用して了ったため、カラビナは無、こゝを吊上げれば何とかなると思い、再びもどり、セカンドのセルフビレイ用のカラビナをはずし、再登攀、カラビナをフルに使用してドウエの中央部に進出する。フインガーホールドの完全なるバランスクライミング、結構オゾイ所だ・あと五米で棚上と云う所で急にザイルが



ピーンと張って動かない。「ミッテル弛めてくれ！」と悲愴な声にて叫ぶ。「弛めてるぞ」。シマッタ、カラビナにザイルが噛まれているのだ。

「あと三米」ミッテルの声。「オーライミッテルザイルをほどいてくれ。三秒以内だ」シブイザイルにともすると破られそうになる。バランスに目をむきながら左手でザイルをたるませつつ逐に棚上に出る。つづくセカンド、ラストとの登攀なり、あくまで青く澄み切った大空、遠く後立山の五竜、底翁に思いを馳せ、昼食とする。取付より四時間を費していた。（福田　記）

34 鹿島槍東尾

P（L）田中実　福田宏三郎　佐藤信治　小田尚於　町田明

装備・天幕二　マット五　スコップ一　ザイル二　ハンマー二　カラビナ十四　ハーケン八　ラジュース二　石油二ガロン

東尾根に出掛けた吾の我々は東尾根に一歩も足を入れる事なくして引返した。無惨な敗退である。薄氷を一面に張りつめた、たんぼに薄茶化したスケーターがどこからともなく舞降りる。秋深い鹿島の里に、どこの家から出るのであろうか、朝夜にも似た一群が右から左に大きく揺れる……前夜境。しかしこの時、朝の空気をゆすぶって重い合唱がこだまする。ソプラノ、アルト、ナーゲル、キスリング。前夜境に朝が来た。力強い若者達が入って来た。鹿島槍デーと呼ぶにふさわしい盛況さである。

さて「登歩渓流会」独標、鋸岳、美校の面々と別れた、とあるパーティは、かの険悪な一の沢に入っていった。七貫前後の荷重で沢登りを始めたのである。十米のF2突破に一時間を費した。いやいや、それだけではない。彼等は南アにも勝るブッシュを二日間こぎ、馬の背の如き枯尾根にヴィヴァークせざるを得なかった。一九二。氷俣隊員は空しく引返した無知をしったリーダーのリードは頼ましかった。だが想像しなかったアルバイトを対等に耐え得たパーティの逞敏な体躯は非常に秀れたものである。再度

の東尾根アタックは彼等の善もがなし得る指南となった事は間違いなかろう。

以下、簡単に報告したいと思います。

十一月二十日（晴快晴後雪）

大町（六二〇～七〇〇）バス 源次（七四〇）－鹿島（八四五～八五五）～二俣（九三五～一一二〇）－可決出合（一二一五～一二三五）－F3（一三四〇 昼食一四三〇）－約一七〇〇水地点（一六三〇）

鹿島槍登山客専用の如きバスが源次に到着した。どのパーティもデカイ荷物だ。我々は先輩を承った。昨年の今日にくらべると少々気温が高い様な気がする。天候異変の前兆だろうか。爺子岳がその大きな風ぼうで我々の意欲をかきたてる。開発工事が年々進んで、道は整備され対岸に広い道路が出来ている。期待したトラックにも会えず、やがて大冷沢出合（二俣）に達する。ここでも予想は裏切られて、飯場のお茶も漬物も話の種に終ってしまう。無人小屋で火をたいて朝食とする。大糸南線から眺望した真白いピークもすっかりガスに隠されてしまった。正午近く、いよいよ出発だ。雪が少ない。東尾根たるや二千米のピーク迄残雪すら見当らない。尾根のブッシュを縫って、一の沢入りに決定した。河岸を歩く事約一時間、水量の豊富な出合に達した。赤岩尾根がその末端をのぞかせる。今日は大いに、にぎわう事だろう。ぬるぬるした沢登りで重荷の我々には危険きわまりない。F2十米には、はばまれる。左側のガリーは岩がもろい。右側の草付きもなお悪い。仕方なく右側を大きくトラバースして滝の落口に降りて来る。無いてF3十五米が現われた。ほとんど不可能である。飯を食った。そしてしばし眺めた。左手の涸沢をつめて尾根にとっつくより仕方ない。トップ福田で登り始める。皆、それぞれ十五分だ、二十分だと云い合ったゆるい沢が、なんと三十分もたったと云うのに半分もゆかない。落石で田中が倒れる。スリップで誰かがずり落ちる。緊張した肉体にも疲労の色が厳然と出て来る。なんと鹿鹿げた登行をしているのだろうか。軽身でも続ける事が出来るだろうか。

焦燥コギが始まった。最早我々は幕営地を探さねばならない。ただ広い凹地（沢状）から尾根へとはい上った。かくして暮色迫る四時三十分、一坪程の、平坦地を切り開いて幕営した。北面から雪を運び、食当若心の肉汁に、一同初めて顔をほころばすのであった。夜半より、いよいよ降雪と相成る。

二十一日（雪後ミゾレ後雨）

出発（九二五）－一三三〇偵察員を出す－幕営（一四一〇）

－雨激しく徹夜で過す。

寝心地の良い所とは云えないが、皆よく寝られた。一面冬荷車の刻形だ。約四十cmの積雪である。

粗炊で出発だ。焦燥の上に積雪とあっては、歩行も全くはかどらない。ブッシュが、ものすごい混然たる雪で我々をさまたげる。トップは約三十m毎で交代せざるをえない。いよいよ窮地に落込ん

だのであろうか。進まぬ事おびたゞしい。気温は比較的高く、身体はずぶぬれである。右側は一の沢に鋭く落ち、左側の傾斜又、急を増す。馬の背の連続である。ブッシュに混って、秋父的な幽木が馬の背をさまたげる。脚は折れんばかりに疲労した。適当な幕営地も見付けてから偵察隊が出るも、「ブッシュ皆々ひどく、フイックス地点に、そして、不可能に等しい岩壁有り」との事で午後二時幕営を始める。かくして、空しくも、我々は引返さねばならなかった。わずか千九百米附近であったのである。

二十二日（シゾレ後時々晴）

出発（八、五〇）―一の沢出合（一〇、五五～一一、一〇）―二俣八屋（一一、四五～一五二〇）―源双（一七、三〇～一八、一五）バス―大町

登る事より、降る方が問題であった。F2のトラバースは危険極まりない。ともかく、慎重な下降が始まった。滑る事この上もない。

一時間で前日の五時間を下る。笹の上は、瓦セードだ。スボンがたまらない。前日のヴイヴアーク地点から、右へ右へと廻り、広い傾斜を飛ばす。身をかくし、ピッケルをしっかりにぎって先を急ぐ。ケネンされた悪い個所もなく二時間で大冷沢林道に飛出した。

昨日の雪は、いかにも冬の山らしく、白い明るく輝いている。このまゝ消える事なく、やがて訪れる白銀の世界の土台となってゆく事だろうか。夏雲にも似た真白い雪が、真青な空に美えんを上げていた。しかし鹿島槍のピークだけは、今日も又厚雲に明け暮れてゆくのであった。なんと下手な登高に終ってしまった事だろう。私はくやしくて耐え切れない気持で、鹿島の空を遥敬するのであった。（田中 実記）

風林火山

堀山から皆吹川流域、殊に鶏冠山に足繁く通った頃から早くも二年半余の歳月が流れた。あの延々たる衣父往復の第一歩は信玄廟が門出を見送ってくれた・そこで思い出すのだが、云うまでもなく、甲斐源氏信玄の旗印は「風林火山」である。早きこと風の如く静かなること林の如く犯すこと火の如く動かざること山の如し。孫子兵法の根本理念だ。これは戦場でのかけひきであるが、山に於いても同じことが言える。刻一刻変転する自然環境とバーティの精神的、肉体的條件の完全な把握と、適切な判断と機動性、そこには一歩の譲歩も妥協も許されない。豪風雪との斗いあり守備あり、そしてわずかの好機に最大限の力を集中しての攻撃あり。それらは単に岩登りだとかスキーだとかの個々の技術だけではとうてい完璧を期することは不可能である。真のクラックスマンはザイル一つの扱いに対してまで全神経を使うものだ。ザイルばかりではない。天幕についても然りキスリングについてもしかりである・器具には血が通っている様に感ぜられるからでもある。装備に対する愛情である……ところが最近装備に対するネジがゆるんではいないか。使用が荒いばかりでなく損傷もそのまゝにする。他人からの借用は無責任に放置しておくのは良い方であり、ひどい場合は又貸し又貸しし遂には行方不明だ。そうなっていても又別に気もつかわないと云った具合、西高山麓部地に落ちたり。OBがこの群で何で年若い西高就役のコーチが出来ようぞ。風林火山は力と技と和あってこそである。力技和は如何に不文律とは云え厳格な規律と相互信頼あっての話である。我々が部に情熱を傾けた頃・何一つ装備はなかった。先輩もなかった。ヤッケがない・よし使わぬ。冬天がない、よい夏天で行け、ラジュウスなし、よし炭を使え・キスリングがない・よし改造だ・ナーゲルなくとも良し、軍靴に鉄打て。シュラフなし、よし毛布で寝よう。こんな具合でやったから本物の装備が手に入った喜びと云ったらなかった。ところが最近では金があったら飲み、装備は買わなくとも借りられる。夏でもシュラフを使う。シュラフがないから雪の山は行けぬと云った具合が真実だ。単だって金が余って器具を買っているんじゃない・ランデブーの金も安くして無ければのサイフとはたいて買うのが本当だ。団体装備にしても同じことが云える苦だ。真に山を愛するものは装備への愛がある。他人のふんどしで山へ行ってもこの愛がなければ行かぬ方がましだ。決して他人に貸すのが嫌だとは云わぬ。持って居ない人には貸すから山へ行って欲いとさえ云おう。要は、金が有るのに他力本願の者と、団体装備に対する一般の注意力喚起を許えたいのである。一人一人が気持よく融通し、そして信頼しあえる様になってこそ風林火山の根本理念も良しとし得る・部発設当時のそして鶏冠時代の若さにかえろう。古参はどうも僕の性に合わない。

（V・G）

会務報告

一九五五・九～一一

(1) 会員移動

△十一月十七日付定配の右除名

6 中野英司

△電話開通

岩崎元子 (39) 九七五一

(2) 器具購入

ラジュース(SYEMA)大型 五五〇〇円

補充ハーケン10 スコップ大1 小鍋2 テルモス1

(3) 会合報告

九月集会 一七日七時田中(将)宅

田中将、鈴木、岩崎、平沢、山口、松田、林武、長崎、田中実、中野、山中、成瀬、加藤、佐藤、小田、福田、伊藤、町田、岩波、渡辺、米野、

(ゲスト)山中新 昭和山岳会鈴木美、高瀬

西高 京田、木下、松田 高山、田辺 計29名

(一)山行報告 魚沼駒 鈴木

(二)山行計画 (30) (31) (32)

(三)秋山の特徴(主として気象について)田中将 (四)ヒマラヤ巡礼展を見て、福田、(五)「星と嵐」「遠藤忠一」山中 (六)スライド取写ハ。校「上越国境」「飛高岩登」「槍剣縦走」「富士山」 (七)係より一集会の始まりがおそくなる。以後時間厳守のこと。

リーダー会 十月七日ポピュラー

田中実、福田、平沢、佐藤

(一)33期七沢を武甲北面に変更、(二)34庭島槍岳東尾根決定、

(三)会例会山行は外部の参加を認めない。

委員会 十月七日

田中将、田中実、平沢、福田、佐藤

(一)会則第三章第四条、第四章第九条改正案

(田中将)提出の認可 (二)西高記念祭展示に於ける写真、スライド展助、(三)和才家援助案(米野)は世野氏と相談の結果我々は主導的立場につかないことゝする。

十月集会 二十三日六時氷川

原 平沢

中野、長崎 町田 林春 佐藤 小田 福田 伊藤 平沢

山中、成瀬 田中実、田中将 山口、林武 亀山 見里

(ゲスト)平山先生 西校北村 計十九名

(一)山行報告 恵谷(田中実) 火打石谷(福田) 熊ノ沢(佐藤) 横嶽(亀山) 魚沼三山(平沢) 赤岩奥又白(田

中実）　(二)一〇・九マチガ沢遭難に関する検討　(三)会則改正案検討　(四)山岳会の開催について

決　議

(イ)個人山行は最小限三日前にCLの許可を必要とし、帰京后廿四時間以内に報告すること。(ロ)会全般が未だ編隊行動の基盤未修得なることを認める。(ハ)事故に際しては至急本部連絡を第一とすること

第一回カタロー会

十一月六日一時山中宅　係山中

山中　山口　田中実　町田　見里　林武　佐藤　岩崎　松田　鈴木　小田　福田

十一月集会　二十六日七時

係　田中実

笹田　鈴木　佐藤　加藤　山中　岩崎　倉山　平沢　福田　田中持　松田　伊藤　町田　見里　水野

(一)山行報告　武甲北面中ノドウエ（福田）　鹿島槍東尾根（佐藤）　(二)委員会報告

(三)会則改正案審議

「第三章第四条」に関する件　(1)改正件　案数1　(2)改正A案2改正B案12案数1　以上により左記の如く改正する、

第四条　本会々員は正会員及普通会員より成り、学校山岳部を除く他の如何なる山岳団体にも所属してはならない。但し学校山岳部所属期間中は正会員として認めない。

「第四章第九条」に関する件

改正案件　現行0　案数1　これにより左記の如く改正する。

第九条　代表は全会員の記名投票により正会員中より選び数を表得したものとする。

右第四条及第九条の改正発効は一九五六年四月一日とする。

会計係より　大口滞納者の誠意ある納入をお願いする。

(4)代表指令　十二月一日付

(一)現有全器具は十二月一日付、一月十五日までに本部に移転集結し、両后の管理は現役小谷野、OB福田を責任者とし、本部がこれを監督する。

(二)器材の使用は如何なる山行といえども定められた規約に従うべきこと、右に従わざる場合は両后の器具貸与を停止する。返直責任は各山行器具係及山行報告責任者がとるものとする。

(三)各員の保管せる器具は自己装備を除き、集団或いは個人のそれにかかわらず(一)に従うべし。

(四)器材損耗甚しきため、使用には各人極力留意のこと。

(五)個人装備、主としてピッケル、アイゼン、キスリング、シュラフ不足につき、一部所有者の損耗大なり、至急充分なる者は良心的に極力補充に努力すること

(六)本会会員（女子を除く）の今后購入するキスリングを左記の通り規定する。

三尺×二・二尺以上

LA MORAINE		1955.9.10−11.30	
27	魚沼駒ヶ岳	9. 10−11	鈴木
28	天 祖 山	9. 11	林(春)
29	(30) 川苔山奥中	9、24−25	田中(実) 鈴木 町田 福田 川口 山中 岩崎 亀山 田中(将) 佐藤 林(武) 小田 平沢 西高部員16名 松本先生 故石川君御 両親
30	谷川岳マチガ沢	10、9	成瀬他3名(同行1名墜落死亡)
31	大菩薩峠	10、9	小田 山中 飯塚
32	土佐標高岳	10、10	中野
33	(31) 魚沼三山	10、9−12	平沢 鈴木 町田 林(武)
34	谷川岳マチガ沢	10、16	福田 米野 西高生松田
35	(32) 穂高岳	10、16−18	田中(実) 佐藤 長崎 見里
36	川苔山	10、23	町田 見里 渡辺
37	木曽駒ヶ岳	10、26−30	福田
38	大菩薩峠	10、30	山中 亀山 小田 米野
39	(33) 武甲北面	11、2−3	福田 小田 町田
40	川苔山	11、3	見里
41	三ツ峠	11、3	田中(実)
42	阿弥陀南稜	11、3−5	田中(将) 長崎 山口
43	穂高岳	11、18−22	田中(将)
44	(34) 乗鞍畳敷稜	11、20−22	田中(実) 福田 佐藤 小田 町田
45	川苔山	11、20	林(春)
46	富士山	11、26−27	安藤 長崎 林(武) 西高生松田

編輯後記

○つい先頃乳首の様な可愛らしい若芽が出たと思っている間に、それはすきとおる様な翠緑の小葉となり、うるおいに満ちた濃緑となり、そして激しい紅蓮の恋に身を焼きつくし峰に又銀色の尖兵がやって来て、また、く間に八ヶ月の半生を紅吹雪に散ってしまった。色即是空。だが記録はまずしいながらも六・七・八・九号として永遠に残るであろう。意欲と認識の歴史は何をおいても残さねばならぬ。空即是色。来年の春に息吹くであろう若芽は、すでにもうその潮を夢見ている。夢よ実かなれ。

○だが甘いことばかり言っては居られない。第三年度冬山は真近だ。我等が信念のために、参加する者は無論のこと、参加出来ぬものも力を合わせて計画完遂を期そう。そうた全力を挙げて。

○今号より「一言ノート」の頁をもう付ました。会の凡ゆる面についての不平、不満、こうしたら良い、あゝしたら良いと思うことを遠慮なく投稿して下さい。他に庶務係として、現役の時の様にOB会の「落書帖」を作る予定です。又すでに「ヴァリエーションノート」が出来て居りますので御利用下さい。高円寺南口「ポピュラー」に連絡帖を置くことにしました。

○第十号は予算の関係で四月まで出せませんので冬都山特大号とするつもりです。（MASA）

西朋報告 第九号
発行日 一九五五年十二月十五日
発行者 都立西高山岳部OB
西朋登高会
東京都中野区大和町一八〇田中方